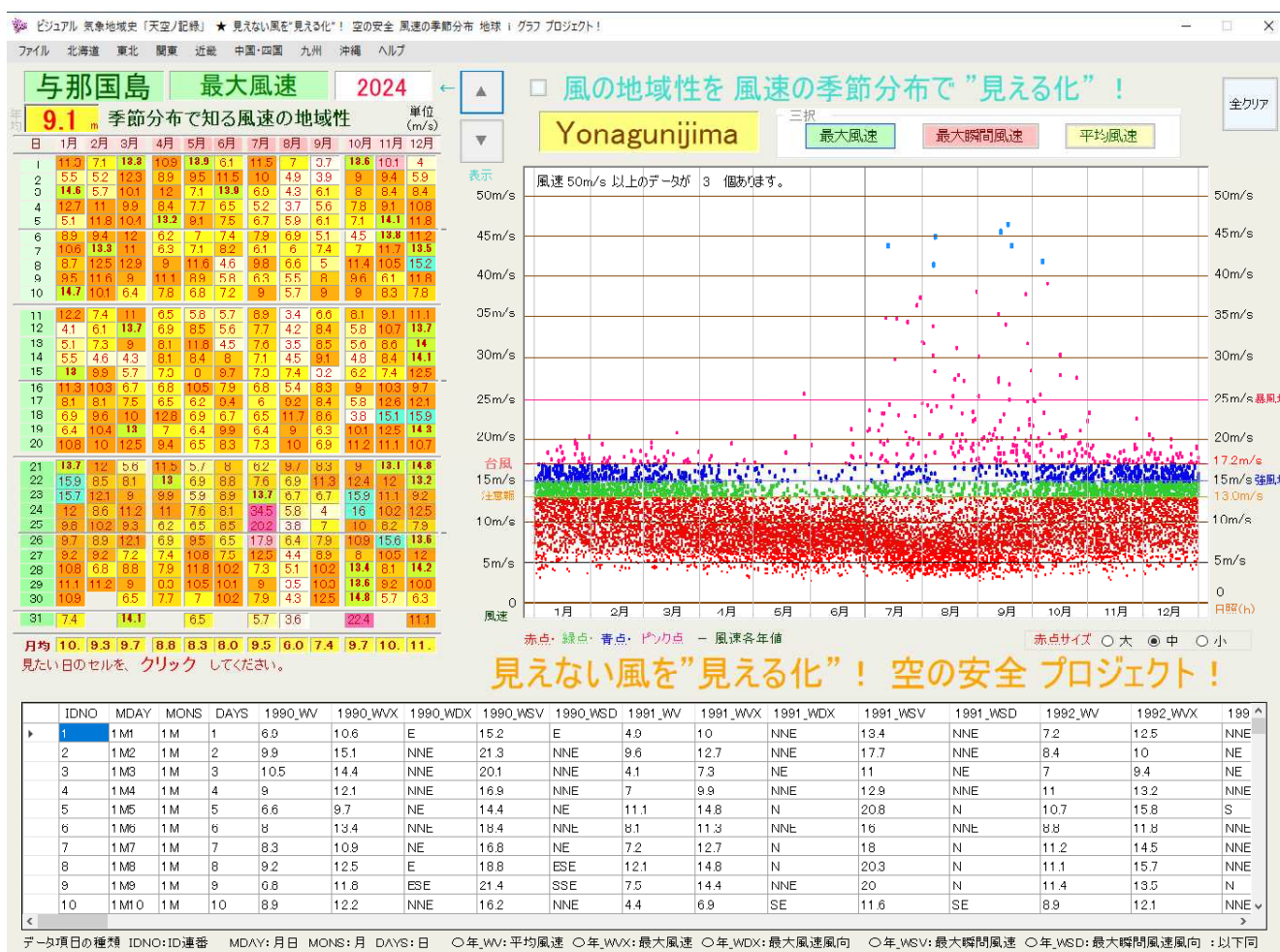


天候急変・風現象がもたらした 山岳事故

序：はじめに

風は目には見えません。普段の生活でも、「風は涼しくて気持ち良いなあ～」程度にしか感じていませんでした。それがなぜ、風に関する「見える化」ツールを作ろうとしたのか？ 思い起こすと、記憶の奥底から様々な経験が浮かび上がってきます。それらをここに記録したいと思います。



A : 「天候の急変による遭難現場への遭遇」

私にとって、山は楽しい思い出ばかりではありません。悲しい事故現場にも遭遇しました。

私が若い頃労山に入っており、今から40年以上前、23歳頃、芦別岳（北海道富良野市近郊 1,726 m）へ3人のパーティーで登りに行っていました。10月10日（体育の日）、前泊し絶好の快晴の元で早朝から登っていました。しかし、7合目あたりから急にもくもくと怪しげな雲が湧き出し、頂上に着いた頃には暴風と視界の無

い吹雪の中でした。頂上を踏むと記念写真を撮るでも無くすぐに降り、風を避けて岩陰に行ってお湯をわかして昼食（ラーメン？）の準備をしていました。すると、下から一人が上がってきて、「下で倒れた人がいるので、助けてください。そのお湯も下さい。」ということで、私たちもすぐに降りていきました。7～8合目あたりでしょうか、その現場はみぞれになっていました。10数人の一行がそこで休憩するなり、「一人の若い女性がいびきをかきはじめた」ので、皆で寒い中で緊急対応をしていました。「酸素ボンベが必要」との求めに、私たちのパーティーのAさんが走って降りていきました。そのあとすぐに、「救助隊が必要」との求めに、次に私が走っていきました。時間にして、20分くらいでしょうか。下山後すぐに地元の山岳会に救助連絡をしました。しかし、祝日でもあり、救助隊が到着し登り始めたのは3時ころだったでしょうか。その後、その方は「亡くなった」との痛ましい知らせを受けました。

「天候の急変で体調をくずし亡くなる」この現場に居合わせた経験もあって、私は「安全な山行」を特に意識するようになりました。その後、私は「アマチュア無線」の免許資格を頑張って取り、高価なハンディ無線機も無理して購入していました。これ以外にも、雌阿寒岳で体調をくずした人をロープで編んだ応急担架で6人がかりで運び下ろすという緊急対応に関わる経験もありました。これらのすべてが、この「天候情報ツール」の開発の原動力になっています。このツールが、「一体何の役に立つの？」と問われても、「安全な山行に役立てたい」としか答えられません。しかし、「絶対に役立つ！」と信じて開発しています。具体的に何に役立つのか？ 今はまだ臆気です。何かに役立つ、今はタタキ台。とにかく、全国に発信したいと思います。

B：「山岳での暴風は人命に関わる重大問題」

北海道「暴風による夏の低体温症死亡事故例」 トムラウシ山

2009年（平成21年）7月、私はそのニュースを聞いた時は信じられませんでした。「北海道 大雪山系トムラウシ山で気象遭難発生。ツアーガイドを含む登山者8名が低体温症で死亡（凍死）。」愕然としました。それは冬ではなく夏の時季でしたし、その数年前の8月に私もトムラウシ山に登っていて、その現場の状況が目に見えただからです。

数年後に発表された事故報告書（『ウィキペディア』）から少し引用します。

「帯広測候所によるとトムラウシ山頂では、事故当時は雲がかかり雨が降っていたとみられ、日中の気温は摂氏8 - 10度、風速は毎秒20 - 25メートルと台風並みだったとされる。生存者によると、「雨と風で体感気温は相当低く、リュックカバーが風で吹き飛ばされ、岩にしがみついて四つん這いで歩くような状態だった」という。旭岳

の別パーティもこのパーティと同じ天気予報を聞いていたが、山の天気が平地より遅れてくるとの経験則から夕方まで荒れると見越して、中止の決断をしたことで遭難しなかった。」

「低体温症（ていたいおんしょう、Hypothermia）とは、恒温動物の深部体温（中核体温）が、正常な生体活動の維持に必要な水準を下回ったときに生じるさまざまな症状の総称。ヒトでは、深部体温（直腸や食道で計測）が35℃以下に低下した場合に低体温症と診断される。また、低体温症による死を凍死（とうし）と呼ぶ。」

（引用：終わり）

私も山登りを愛好してきたので、「気温の低減率」による気温低下や、風による体感気温低下は知っていましたが、「低体温症」のことは全く知らず、無知を痛感しました。

このような痛ましい事故が、二度と起こらないように、という思いがこの風のツール開発の原動力になっています。**※なお、観測点の場所と、山岳地域の状況は大きく異なると思いますので、その点を充分留意して、このツールをお使いいただきたい**と思います。

以下に、引用先の出典URLを記載します。

トムラウシ山遭難事故（2009年） 出典：フリー百科事典『ウィキペディア』

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%A0%E3%83%A9%E3%82%A6%E3%82%B7%E5%B1%B1%E9%81%AD%E9%9B%A3%E4%BA%8B%E6%95%85>

また、（2002年）の事例も併せて紹介します。

トムラウシ山遭難事故（2002年） 出典：フリー百科事典『ウィキペディア』

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%A0%E3%83%A9%E3%82%A6%E3%82%B7%E5%B1%B1%E9%81%AD%E9%9B%A3%E4%BA%8B%E6%95%85_\(2002%E5%B9%B4\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%A0%E3%83%A9%E3%82%A6%E3%82%B7%E5%B1%B1%E9%81%AD%E9%9B%A3%E4%BA%8B%E6%95%85_(2002%E5%B9%B4))

風速と体感気温

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BD%93%E6%84%9F%E6%B8%A9%E5%BA%A6>

気温逡減率

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%97%E6%B8%A9%E6%B8%9B%E7%8E%87>

C 気象庁： 「台風の大きさと強さ」 定義

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/typhoon/1-3.html>

D 気象庁： 「台風の大きさと強さ」 について

https://www.data.jma.go.jp/multi/cyclone/cyclone_capl原因.html?lang=jp

引用ばかりになってしまいました。済みません。

記述日： 2025年5月28日